

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2009

課題番号：18330161

研究課題名（和文）前近代日本における識字力の分布および展開過程に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Distribution and the development of Literacy in Premodern Japan

研究代表者

大戸 安弘（OHTO YASUHIRO）

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授

研究者番号：90160556

研究分野：日本教育史

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：識字、花押、民衆教育、前近代、略押

1. 研究計画の概要

(1) 未開拓の状況に近い前近代日本における識字力の展開過程に関する量的把握について解明するために、識字の最低ラインを示す資料として「花押」に注目し、とりわけ民衆層の「花押」が記載された資料の蒐集に努める。また、その量的把握ないしは質的分析を通して、前近代日本の社会における民衆層の識字力形成の一端について明らかにする。さらに、民衆資料のなかに識字力に関連するものについても分析を行い、多面的・重層的に課題にアプローチする。

(2) 研究成果を海外に向けて発信するために、海外の識字研究者とのコラボレーションを行うことも重要な課題である。このことによって、これまで主として欧米の識字研究者が進めてきたアルファベット文字圏に関する研究への偏重を、表語文字の漢字に独自の表音文字をシステムを混合させて使用する日本における識字研究を通して、是正させるという、大きなねらいがある。

2. 研究の進捗状況

(1) 資料蒐集については、2006 年度・2007 年度の 2 年間で、かなりの蓄積をみせている。これらに、さらに以前の調査活動で蒐集した資料を加えて、相当数の「花押」資料についての分析・検討が進められてきた。その結果の一部は、毎年開催している研究会での論議を経て、学会発表および論文等の作成として結実しつつあるが、

今後、そうした状況は加速される見通しである。

(2) 海外研究者との研究交流が大きく進展したといえる。研究メンバーのなかには、既にアメリカにおける東アジア研究の拠点校の一つであるインディアナ大学において、研鑽を積んだ経緯もあるが、2006 年度にもメンバーの一人である川村肇が同大のルビンジャー教授の下で在外研究を行うことで、日常的な研究のベースを形成し、その結果として、2006 年 11 月にアメリカ合衆国インディアナ大学において開催された「日本における識字の歴史」と題された国際カンファレンスで、7 名のメンバーが研究報告を行った。白熱した討議にも積極的に参加するとともに、カンファレンスに参会し、多様な角度から識字研究を推進している欧米の研究者との研究交流を進めた。なお、このカンファレンスでの研究報告については、インディアナ大学リチャード・ルビンジャー教授が編者となり、2008 年 8 月に、同大より報告書として刊行された。

(3) 海外での識字研究の成果が、日本に伝えられる場合、その専門研究者にストレートに伝わるが多く、研究成果が広く理解されているとはいえない状況がある。このような隘路を切り開くことに貢献する成果として、研究交流を進めてきたルビンジャー教授が 2007 年に出版された『Popular Literacy in Early Modern Japan』（ハワイ大学出版部）を、メンバーの一人である川村肇が、『日本人のリテラ

シー』(2008年、柏書房)として翻訳刊行し、多数のメディアで書評として取り上げられることにより、識字研究の国際交流の一端を知らしめる契機となった。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

(理由)

識字資料としての「花押」についての資料蒐集が、予定していた調査対象範囲内でほぼ修了し、さらに、それらの資料を用いた研究成果が徐々に始めている。また、海外の識字研究者とのコラボレーションについても、国際カンファレンスでの活動とその結果としての報告書の刊行によって、計画通りの到達点に達している。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 過去3年間の研究活動の集大成として、次年度には国内学会(教育史学会を予定している)において、共同研究の成果としての学会発表を計画している。この点については、すでに今年度の研究会において4名のメンバーによる研究報告がなされており、メンバーの多くが研究発表に臨む見通しである。

(2) 海外研究者との研究交流についても、インディアナ大学ルビンジャー教授および同大のエリソナス名誉教授との情報交換をさらに進め、そこからより広範な海外研究者との研究ネットワークを構築することを目指したい。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 15件)

太田素子、「『継声館日記』にみる近世在郷町の識字状況」(和光大学『現代人間学部紀要』第2号、163-176、2009年、査読有)

大戸安弘、「仏教教育としての遊行の位相」(筑波大学大学院『教育学論集』第3集、37-66、2007年、査読有)

八鍬友広、「訴の時代 言説の効力」(『歴史評論』第688号、26-37、2007年、査読有)

[学会発表](計 3件)

木村政伸、「史料が開く近世教育史の可能性」(第27回日本教育史研究会サマーセミナー、2008年8月5日、立教大学文学部)

[図書](計 7件)

太田素子、『子宝と子返し 近世農村の家族生活と子育て』(2007年、藤原書店、428頁)